第四話　鶯のはなし

【鶯】

●鳴き声の美しいことで有名な小鳥。野鳥で日本全国にいます。

●日本産の鳥類の中では、鶯のように体色が緑色をした鳥類は、少ないです。外国産ならば、鸚鵡や鸚哥など、それほど珍しくはありません。

このはなしを読むにあたって

庭に来る鶯を友人たちに自慢しようと思ったのに、用事を言いつけた相手が悪くて、とんでもないことになってしまいました。たのみごとは相手をよくみてからにしましょう。

鶯の災難

京都に、大中臣輔親という貴族がいました。

輔親の屋敷は、それはそれはりっぱでした。広い庭には大きな池があり、いろいろな花や草木も植えられていました。

ある年の春のこと。一羽の鶯が、輔親の庭の梅の木をえらく気に入り、毎朝、午前十時ごろになるときまってその梅の木へやって来るようになりました。

そして、それはそれは美しい声で鳴いてくれるのです。

輔親はおおいに喜び、毎日、この鶯の声に耳をかたむけることを、なによりの楽しみにしていました。

そのうちに、輔親にひとつの考えが浮かびました。知りあいの歌詠み（和歌を詠む人）たちを屋敷へまねき、この鶯の鳴き声を聞いてもらいながら歌を詠んでもらったら、どんなに素晴らしいかと。

そこで、みんなに、

「明日の朝八時ごろにわたしの屋敷へお越しください」

と声をかけました。さらに、家来の侍に、

「明日の朝には、だいじなお客さまがおおぜい、ここへ来られる。みなさん、鶯の声がお目当てだ。だから、鶯を追いはらったりしてはいかんぞ」

と命じておきました。

驚いた輔親が、

「これはいったい、どうしたことだ？」

と大声をあげますと、侍が言うには、

「こいつは、このお庭へ来てしばらくすると、どこかへ飛び去ろうとしたのでございます。鶯を追いはらってはならないというご命令でございましたので、わたくしが、腕によりをかけて神頭の矢（先がとがっていない矢）で射落としました。そして、この通り、縄をかけておいたのです。これで逃げられる心配はなくなりました。ご安心ください」

（『十訓抄』巻第七ノ三〇）